令和元年度　学校経営計画に対する最終評価報告書

Ｎｏ．１

石 川 県 立 寺 井 高 等 学 校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 総合学科の特長を活かし、主体的、対話的で深い学びを取り入れた授業実践を通して、個々に応じた進路実現を目指す。	① 総合学科の特長を活かし、生徒の多様なニーズに合わせた科目選択や体験活動を通して、生徒の進路実現を図る。	総合学科として、科目選択や様々な体験が生徒の進路実現に意義あるものとなっている。 (ｱ) よくあてはまる (ｲ) ややあてはまる (ｳ) あまりあてはまらない (ｴ) あてはまらない (ｱ)＋(ｲ)の％　９０％以上　Ａ、８０％以上　Ｂ ７０％以上　Ｃ 、７０％未満　Ｄ	生　徒　８４．０％ B 保護者　８８．１％ B	２月中旬に行われた２年生保護者対象の進路説明会は、例年を大きく上回る８０名以上の方に参加していただき、非常に有意義であった。今年度初めて開催した７月上旬の１年生保護者対象の説明会と併せて、保護者へのタイムリーな情報提供や情報交換の場として今後も発展させていきたい。生徒対象の取組としては、年６回「進路通信 TRY」を発刊（特進クラス生徒の上級学校合格状況を特集した「増刊号」を含む）したり、様々な進路行事についての記事をホームページへ掲載した。このように小まめな進路情報の発信を次年度も継続強化していく。
	② 学習習慣の定着と学びやすい学習環境を整備することによって、生徒がより主体的に学習しようとする意欲の向上につなげる。	集中して授業に取り組むことができるようになったと感じる生徒の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	生徒　９２．０％ A	後期授業評価の質問１「私はこの授業に集中して取り組んでいる」に対して、「そう思う」および「だいたいそう思う」と回答した割合が前期と同じく 92.0%と高い結果が出ており、年間を通して、生徒の授業態度は落ち着いていたと評価できる。要因としては「ルール５」「マナー３」の教室掲示による啓蒙、教員による授業中の見回り、各学年からの授業規律に関する報告への早期対応などがあげられる。今後も教員同士の連携した取り組みを継続していく。
	③ 毎時間の授業において、学習目標、流れを明示し、振り返りをさせることで、学習内容の理解度と達成感を高める。	授業が分かりやすいと回答する生徒の割合が Ａ　８５％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７５％以上 Ｄ　７５％未満	生徒　８９.３％ A	後期授業評価の質問３「この授業はわかりやすい」に対して、「そう思う」および「だいたいそう思う」と回答した割合が、前期の 86.4%からさらに約３ポイントの向上が見られた。前期・後期ともに、教員は各自の授業評価結果から自己の課題を見出し、その改善のための方策を検討、実践してきた成果が表れてきていると考えられる。今後もさらに授業改善を進めていく。
	④ 個別進学指導や朝学習（マナトレ）、模擬面接等の充実を図り、個々の生徒に応じた進路志望を達成する。	ア・イ・ウの３指標のうち ア　国公立大学合格者数 5 名以上、 イ　私立大学合格者数 40 名以上 ウ　就職内定率 100% Ａ　３指標すべてを達成 Ｂ　２指標を達成 Ｃ　１指標を達成 Ｄ　３指標とも達成できず	ア　２名 イ　３６名 ウ　１００％ C	進学については、私大・短大の推薦入試結果は良好であった。国公立大の推薦入試に不合格となった場合、一般入試に対応するために必要な学力の維持や向上が課題であった。しかしながら今年度の３年進学クラスは、担任と副担任（進路指導課の進学担当者が兼任）の努力と工夫により、受験の雰囲気ができていた。次年度からは推薦入試（学校推薦選抜に名称変更）でも学科試験を課す場合が増えるので、私大・短大を含めて対策を講じたい。就職については、内定が１００％に達した。社会の急激な変化を踏まえて、基礎学力とともに社会人基礎力や人間力の育成をさらに進めていく必要があり、次年度も学校全体で取り組んでいく。
学校関係者評価委員会の評価		・進学においても就職においても、生徒は目標が明確になることによって、勉強への意欲や生活態度が変化する。生徒の学力や進路に対する意識を的確にとらえて、確実に進路実現できるように、時期を逸せず、保護者と連携をとりながらきめ細かい指導をしてもらいたい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		・生徒それぞれの進路実現のため、生徒の学習状況・学力や進路に対する気持ちをしっかり把握して、生徒へのタイムリーな指導と生徒・保護者への進路に関する情報提供をこころがけたい。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
２ 部活動や体験活動を柱に、生徒のコミュニケーション能力や規範意識、自律心の向上を図り、人間力の育成に努める。	① 登校指導や街頭指導、地域に出向いての活動等でしっかりと挨拶ができるよう指導を行う。	自ら進んで挨拶が出来ると回答した割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	生徒　７４．２％ C 保護者　８２．６％ B 教員　５４．８％ D	生徒・保護者と教員との間に挨拶に対する意識の違いが見られる。登校指導や街頭指導などで、挨拶する生徒は増えてきていると感じるが、全体的にみるとまだ十分とは言えない状況である。生徒会や部活動による挨拶運動は効果を得ているとは思うが、参加している生徒が限られており、学校全体の取り組みになっているとは言えない。今後は参加する生徒を増やし、自ら率先して挨拶できる雰囲気を学校全体で作っていきたい。
	② 交通安全教室や街頭指導等を通して、交通ルールを守る指導を行う。	交通ルールや自転車乗車マナーを守っていると回答した割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	教員　５９．５％ D	今年度、警察による交通違反指導は昨年度の 56 人から 22 人と減少しており、交通ルールを守る意識は向上していると思われる。しかし街頭指導をしていると、右側通行やイヤホンをつけての走行などが目立つ現状がある。また外部より自転車の乗車についての苦情電話も数件あった。街頭指導の場所を増やし、集会や各クラスでルールについて粘り強く指導を行っていく必要がある。事故件数も昨年の５件から８件と増加している。被害者にも加害者にもならないという観点からの指導を強化する。
	③ 部活動の活性化を通して、生徒の自律心を向上させ、人間力を育成する。	部活動に対し、満足感や達成感を感じている生徒の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	生徒　６６．５％ C	前期と比べてわずかな上昇が見られるが、70%には達していない。部加入率は約 90%であり、特に文化部の活動を盛んにすることで満足感や達成感を感じる割合を高めることができるのではないかと思われる。また、途中入部の数をもっと増やせるように、退部した生徒に特活課や担任などからの働きかけを強めていきたい。
	④ 「学校いじめ防止基本方針」をもとに、いじめの問題に学校が一丸となって組織的に対応する。	いじめの未然防止に取り組み、発生時には必要な情報を共有し、迅速な対応をする教職員の割合が Ａ　１００％ Ｂ　９０％以上 Ｃ　８０％以上 Ｄ　８０％未満	教員　９７.６％ B	「非行防止教室」や「インターネットトラブル防止教室」などで、具体例を挙げて話をしてもらうなど、いじめは絶対ダメであることを認識させる取り組みを行った。今年度認知したいじめは、いずれも早い段階で組織的に対応することができ、現在は解消もしくは解消に向かっている。年３回のいじめアンケートは認知にも効果はあるが、抑止力にもなっており、今後も継続する。今後もいじめは必ずあるものと認識し、生徒への注意喚起を行うとともに発生時には迅速かつ適切に対応していきたい。

学校関係者評価委員会の評価	・挨拶をしっかりできない点が寺井高校生の課題であると事前に聞いていたが、生徒たちに何度か会ってみると、元気に挨拶をしてくれた。ただ、挨拶には①ルールとしての挨拶②自分の気持ちの表現としての挨拶③強要された挨拶などがある。社会人として挨拶は心からするものであると考えるので、寺井高校においては挨拶の質を追求して欲しい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・教師側から挨拶すると生徒から挨拶が返ってくる割合が増え、年々、少しずつではあるが生徒の挨拶は良くなっているように思われるが、依然、満足のできるものではない。挨拶の励行と質の向上を目指し、職員の共通理解のもと学校をあげて挨拶の指導を推進する。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
３ 地域連携の充実や学校情報の積極的発信、学校業務の効率化を図り、保護者や地域に信頼される学校づくりを推進する。	① 生徒が積極的に地域へ出向いていく活動を推進する。	地域の活動に参加する生徒（実人数）の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	８０．６％ A	11 月になってほとんど全ての３年生がキャリアリハーサルのフィールドワークで地域に出かけていった。また、２月にあった能美市耐寒継走選手権に昨年度の倍近い生徒が参加した。部活動でも野球部が野球教室を開催し、ＪＲＣ部が昨年度に比べて多くの行事に参加していた。次年度には、参加数だけではなく、活動内容も考慮して、地域はもちろん参加した生徒が満足感を感じられるような活動にしていきたい。
	② ホームページの更新や学年や各課からの通信、メール配信を随時行い、学校の教育活動を積極的に発信する。	広報活動（学校ホームページ、学年・各課からの通信、メール配信）が充実していて、学校の取り組みに対して理解が深まったと回答する保護者の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	７８．９％ B	前期とほぼ同じ結果となり、A 評価には達しなかった。ホームページの小まめな情報更新や、学年・各課の保護者への便りの内容の充実、メール配信でのタイムリーな情報発信等、今後もより一層の工夫を加えていく必要である。保護者のメール配信登録は 80%を超えたが、より 100%に近づくよう次年度は呼びかけを徹底したい。
	③ 教員が担当業務に応じてタイムマネジメントの意識を高め、学校業務の効率化を推進することで、勤務時間外の労働時間を削減する。	業務の効率化やタイムマネジメントの意識が高まったと回答する教員の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	８８.１％ B	業務の効率化やタイムマネジメントの意識が高まったと回答した教員が前期の 85.8%より増加し、90%に迫る良好な状況が続いているという結果であった。具体的には、時間外勤務が月 80 時間以上の教員は減少していて、月１回の定時退校日についても多くの職員が実行するようになった。今年度の結果に満足することなく、来年度においても職員研修を重ね、さらに業務の効率化やタイムマネジメントの意識を高め、生徒と接する時間を増やす方策を考えていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	・地域の活動に寺井高校生が参加していることは大変意義のあることだと考える。甲子園に出場した北海道の高校の野球部が地域の子どもに対して野球指導をしている姿がテレビで放映されていた。地域の子どもにとって野球部員が憧れの存在になり、その学校に進学したいという気持ちが芽生えることにもなる。地域の活動に寺井高校生が参加することは、生徒にとってより良い体験や経験になり、学校の良いアピールにもなり、寺井高校に進学したいという気持ちが芽生えるのではないか。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・昨年度よりスーパーコミュニティーハイスクール（ＳＣＨ）を掲げ、地域の方々との連携を通じて、地域を愛し、地域から愛される人財の育成に努めている。例えば、野球部が豊美保育園へ訪問して野球教室を行っていて好評を得ている。野球部だけではなく、運動部、文化部ともに幼稚園・保育園、小学校や中学校と関わっていくことを計画して地域との連携強化を図っていきたい。